

## 社会主義モンゴルにおける文化的人間の育成： 牧民家庭における文化教育とアジテーション活動を中心に

滝口 良

20 世紀初頭に社会主義革命を経たモンゴルでは、第二次大戦後から集団化を中心に本格的な社会主義建設が開始された。地方では 1950 年代から遊牧民の集団化政策が強力に推進されはじめ、遊牧民の社会組織が農牧業協同組合に再編されていく中で、地方の生活は大きく変化しようとしていた。

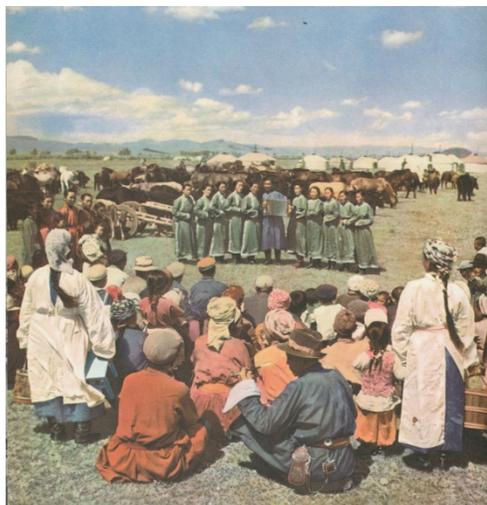
本報告では、この時期のモンゴルで行われた「文化攻勢 (*soyolyn dovtolgoo*)」(1958 年～1963 年)を中心に、社会組織の再編が進む地方生活に対して実施された文化教育政策をとりあげた。この政策の眼目の一つは、「後進的」とされた遊牧生活を「文化」によって改善し、牧民を古い社会から切りはなして「文化的人間」へと教育することにあった。

1950 年代にはじまる社会主義建設を背景に全国的に実施されたこの文化教育政策は、新たな社会にふさわしい市民主体を育成するという目的をもっていた。そのため、その教育内容は、マルクシズムの理解や共産党の歴史をはじめ、計画経済や集団生産活動の必要性など、イデオロギー的・教化的な性格を色濃く持つものであった。しかし、本報告では、「文化攻勢」が社会主義的なイデオロギー教育にとどまるものではなく、人々の日常生活の物質的環境を改善するとともに、人々の具体的な行動や考え、性格を教育し、人格を陶冶するという実践的な教育の側面をもっていたことに注目した。

本報告では、以上のような特徴を持つ 1950 年代から 1960 年代にかけてのモンゴルにおける文化教育のなかから、広大な土地に点在して生活している遊牧民の家庭生活や生産活動に向けて実施された文化教育の具体的な教育手法や実践を対象とし、以下の二つの論点を中心に報告を行った。

第一に、1958 年から開始される「文化攻勢」前後の時期には、地方における文化教育施設の拡充および文化教育の手法の開発が全国的に進められていた。社会主義革命以来、市民に対して党の宣伝活動を行っていた従来の「アジテーション (*агитация*)」活動の形骸化が問題視され、その改善の必要性が議論されていた。本報告では、『アジテーター・ハンドブック』などの資料をもとに、アジテーターによる遊牧民への文化教育の手法の開発や、アジテーターを育成する教育についての議論を分析した。これらの検討により、文化教育のエージェントとして活動していた「アジテーター (*агитатор*)」が、党の宣伝員としてそのイデオロギーを人々に教化していただけだけではなく、遊牧民家庭の衛生検査、新たな遊牧手法や道具の使い方の教授、遊牧民の労働時間の管理など、一種の生活指導員として相当に広い活動内容が期待されていたことを明らかにした。

第二に、地方における文化教育機関やアジテーターを含む教育に関わる構成員は、集団化による生産組織の再編に即した形で再組織されていた。本報告ではその中でも集団化によって牧民の基本的な生産単位として組織されたソーリに対する文化教育の組織化に注目した。協同組合から割り当てられた家畜を牧養する遊牧する生産単位「ソーリ」は、遊牧の伝統的組織「ホト・アイル」に代わる新たな社会主義組織として構想されていた。ソーリにおける学童教育は、後に「ソーリ学校」として公教育に組み込まれていくことになるが、「文化攻勢」政策におい



牧民の自主的な芸術サークルの活動の様子

では、ソーリを構成する複数家族が自主的に学習し、お互いに労働活動を評価し、自主的に芸術活動を行うという家庭教育のモデルが構想されていた。本報告では、遊牧する生産単位であるがゆえに、上述のオホーラグチや行政による組織的な教育や管理が行き届きづらい遊牧民家庭（ソーリ）において、自主的な学習環境の構築を促すために用いられた手法やモデル（回覧板、牧民カレンダー、芸術サークル）について検討した。

以上の検討によって本報告は、社会主義建設期のモンゴルにおける市民育成の一例として、遊牧民に対する文化教育の組織的な実践を明らかにすることができた。その

上で、本報告の今後の課題として、当時の人々の意識や実践に関する研究の必要性を挙げておきたい。計画経済化・集団化とこれにともなう新たな社会関係の創出と文化教育が、当時の市民生活のさまざまな場面に影響を与えたのは確かである。だが、そうした状況の中で当時の人々がどのように考え、どのように応答しながら生活を営んでいたのかに關しての研究はほとんどなされていない。今後はこうした観点も含めて「社会主義体制下のモンゴルにおける市民の日常生活」という主題をさらに詳しく検討していきたいと考えている。

(たきぐち・りょう／北星学園大学 非常勤講師)

## ブラボー！喝采が生んだ広場：文化人類学から広がるまちづくりの視点

片桐保昭

人と人、モノが予期せぬ関わり合いを経て「文化」に至るのなら、都市空間は文化以前の境界状態を予持する領域ともいえる。この空間は公共的な機能を明確化できぬゆえに人類学なくして作ることはできない。そこで本発表は文化人類学から見た都市空間デザインの一つのあり方を示すことを目的とした。

旧来の文化人類学において、都市空間の作られ方については、均一的な都市計画へのアンチテーゼとして地域からの視点が強調され、近代の都市計画において対象化されていない境界性やその成立過程が「文化」の表れとして注目された。近年ではこの成立過程においても、とりわけさらにアクターネットワーク理論やオブデュラシー等の科学社会学の成果を取り入れ、ヒトとヒト、ヒトとモノの予期せぬ結びつきに注目が集まっている。

この中で発表者は、あいまいな境界性が予期せぬ結びつきのきっかけになることに注目し、発表者自身が設計に参加した「小樽文学館美術館多目的広場」に、あいまいなモノを設置することによって、近代の都市計画において対象化されていない境界性を成立させることを試みた。

具体的には、即興舞踊とサウンドスケープによる表現をあいまいなものとして用い（舞踊：中村達哉氏、サウンドスケープ：四方暢男氏）、広場や広場の境界を成立させている歴史的建造物を含んだ都市景観にあいまいで解釈が自由なモノをまぎれ込ませるといふ社会実験を、サイエンスカフェ形式で行った。実施日時は2011年年6月12日（日）、15:30～17:00である。

この結果、最初は静かだった入込み客（約40人）の反応は、最終的にクラシックバレエの作法に則った喝采へと変化した。これは、入込み客にとってあいまいな都市空間が西洋社会でいう「芸術」的な空間へ落ち着いたという社会的構築の過程といえる。

近代都市計画においては機能や意味が明解なモノしか想定できないが、近年の文化人類学の成果は、機能や意味があいまいなものをも想定してつくり出すということに応用が可能であり、その人工物を何らかの社会過程を励起するきっかけとして提案できることが明らかになった。この結果は都市空間デザインの方法論に、文化人類学から新たな視点を加える意義深いものといえよう。

（かたぎり・やすあき／北海道大学大学院文学研究科）

## 中国雲南省ワ族の文字使用に関する社会言語学的考察

山田 敦士

中国雲南省西南部に居住するワ族（漢語表記で人偏に瓦）は、伝統的な表記習慣のない民族集団である。20世紀になり、外部より二種類のローマ字表記（宣教師式転写法、政府式転写法）および漢字がもたらされ、現在、一部に文字使用の実態が生まれている。この文字使用の実態について、学術的な見地からの報告はほとんどなされていない。このような現状を踏まえ、本発表では、1990年代後半からのフィールド調査によって得られた知見に基づき、文字の使用状況について報告・分析をおこなった。具体的には以下の二点について議論をおこなった。

### （1）文字史略および公定文字観の検証

宣教師式ローマ字転写法は、20世紀の初頭にビルマから入植した宣教師によって作成されたものである。これは、超文節素や音節末子音といった重要な音韻の要素が反映されないなど、多くの言語学的問題を抱えたものであった。さらに、布教を隠れ蓑にした侵略的行為とみなされた当時（そして今も）の政治情勢も影響し、その使用はきわめて限定されたものであった。一方の政府式のローマ字転写法は、中華人民共和国の建国にともなう一連の少数民族政策の中で生み出されたものである。この表記について、宣教師式のものよりも音韻体系に忠実であること、言語政策的に正統な存在であることが繰り返し強調されてきた。また、その成果を強調するかのよう、二十余年の試行期間を経て、文盲率が一割程度に減少したというような報告もおこなわれている。しかし発表者の体感では、それは漢語のピンイン転写法を含めた「ローマ字に触れた経験」程度のものにすぎない。実際に表記・伝達という文字使用の根幹を担うまでの習得はほとんどみられないのが現状といってよい。その一因として、漢字との「使用領域」の重なりを指摘することができる。この表記法は、対外的に異文化象徴としての役割を果たす点で特徴的ではあるものの、その他の点においては、あくまで国家文字である漢字の社会的機能（上下下達の手段など）に対する模倣にとどまっている。これは政府管理による普及計画下にあることと無縁ではないだろう。現状を見ると、この文字が漢字以上に広まりをもつこ

とは考えにくい。それどころか、政治・経済的な利点から、漢字のみを志向するような状況も観察されている。

## (2) 宣教師式ローマ字転写法に関する新しい動態

政府式ローマ字転写法が停滞する一方で、宣教師式ローマ字転写法をめぐって新しい動態が生まれつつある。言語学的な問題を抱えていた宣教師式ローマ字転写法は、国外（タイおよびビルマ）のパプテスト教会において修・訂正が加えられた。これにより、表音文字としての精度は政府式のものと同程度になった。現在、この改良転写法によって表記された聖書や讚美歌集などが、中国国内での出版というかたちをとり、域内に再流入している。この改良版転写法は、定期的な普及プログラムなどの教会活動を経て、域内のキリスト教化集落にかなりの程度浸透しつつある。しかし、これは真の意味での識字が達成されていることを意味しない。教会活動によって「識字」者とみなされた人々であっても、聖書や賛美歌という文脈を離れると、何の読み書きもすることができないからである。この点において、政府式の転写法と同じ状況である。しかし、真の意味での識字が伴わないのは政府式の表記と同じであるにもかかわらず、宣教師式の表記に活気があるのはなぜだろうか。発表者は、教徒たちが文字を受容するに際し、「読み書きすること」よりも「持つこと」に積極的意義を見出しているからではないかと考えている。このことは取りも直さず、文字の社会的機能に文字選択の基準がおかれ得るということの意味する。

言語学的にみれば、表音文字の第一義はまぎれもなくその実用性にある。しかし、コミュニティの社会的、文化的経緯によって、実用性を超えたところに選択の基準がおかれ得る。これは、言語が文化的、社会的産物であることを再認識させる出来事である。発表者の専門とする民族言語学では、研究成果や一次資料自体を現地へ還元することが重要なテーマとなっている。今後、いかなるかたちをとっての還元が望ましいのか、改めて考えるきっかけとしたい。

(やまだ・あつし／北海道大学大学院文学研究科 専門研究員)

## 市立函館博物館所蔵八雲関連アイヌ資料

大矢京右

かつて蝦夷地と呼ばれた北海道には、多くのアイヌが居住するとともに、本州から渡ってきた和人も混住していた。特に北海道南部は中世以降漸次和人が渡道して生活基盤を固めており、伝統的な生活を営むアイヌの集落は全道的に見て少なかった地域であると言える。従って、道南地域で収集されたことが判明しているアイヌ資料は全国的にも極めて稀で、その一部が市立函館博物館に収蔵されていることもあまり知られていないのが現状である。

本発表では市立函館博物館が所蔵する八雲関連アイヌ資料について、文献調査および聞き取り調査をとって判明した事実とともに紹介する。【本号「資料」として掲載】

(おおや・きょうすけ／市立函館博物館)

## トナカイ乳加工の過去と現在 ―トナカイ牧畜の草原化― モンゴル国北部タイガ地域の事例

西村 幹也

本発表では、モンゴル国北部タイガ地域に居住するトナカイ飼養民ツァータンの乳加工過程を報告するとともに、モンゴル地域における乳加工過程と比較し、両者の違いについてツァータンを取り巻く生活環境、社会環境と関連づけて考察を試みた。

モンゴル国フブスグル県西部国境付近には30数世帯がトナカイを飼育しながらタイガに居住している。彼らは1932年の国境制定時にモンゴル側に残されたトバ民族であり、ロシア連邦トバ共和国のトバ民族と同族になる。社会主義時代初期においては、馬飼いや羊飼いやなど同列の職業名称として「トナカイを飼育する者」を意味するモンゴル語ツァーチンと呼ばれていたが、1970年代過ぎには「トナカイを所有する者」を意味するツァータンが一般的となり、モンゴル民族の低位集団であるかのような使われ方をするようになっていく。本来母語はテュルク系のトバ語である。基本的に仏教徒である彼らはモンゴル側との関わりが深く、周囲のモンゴル人の影響を大いに受けることとなり、20代以下のトバ語話者は極端に少なくなっている。なお、本報告では、対象集団を、比較的名前の通っているツァータンと呼び表すこととする。

ツァータンの居住するタイガ地域はフブスグル県西部ダルハド盆地に接している。この地域は1600年代にモンゴル中央の活仏の直轄領となり、この地に居住していたモンゴル系、テュルク系、サモエド系などの諸集団の再編成が始められた。結果、多くがモンゴル系のダルハド人を自称するようになり最多数集団として低地草原地域を支配的に利用するようになったが、川の上流域や森林地域に生活拠点を置く集団は存在を続け、ダルハド人の影響のもと、モンゴル化していく過程にある。すなわち、この地域はいまだダルハド化＝モンゴル化が終わっていない地域であるといえる。中でもツァータンは、トナカイ飼育環境がタイガである故に、モンゴル化が最もゆっくり進んでいる集団であるといえる。

しかし、モンゴル化は彼らをタイガ地域につなぎ止める最大要因となっているトナカイ飼育の目的や方法を変えることから始まった。そもそも狩猟採集民であった彼らのトナカイ飼育目的は輸送交通手段だったのだが、社会主義時代には食用を目的とし大規模群飼育を推し進めるようになったのである。しかし社会主義崩壊と同時にこの政策は棚上げとなり、資本主義移行期の混乱の中でトナカイの数を著しく減らすことになってしまう。ところがこの地域で金鉱山が発見され、鉱夫が押し寄せるようになるや、交通手段としてトナカイの需要は増え、また観光産業の発達にともない、今ではツァータンの生活はある程度の安定を見せ始めている。この生活の安定化と軌を一にしてダルハド女性のタイガ嫁入りが増え始めている。

このような状況の中、彼らのトナカイ乳加工に変化が観察された。2000年頃までには、見る事のなかったバター制作、利用がダルハド女性を嫁に得た世帯周辺で見られるようになっていくのである。以前であれば、乳は茶に混ぜるか、潤沢にある夏期であれば、加熱してそのまま食すかであったが、トナカイの数が増え、利用できる乳の量が増えたことも多いに関係していると思われるが、自家消費するだけだったチーズを麓で売るに至っている。

ただ、特徴的なのは加工過程にある。モンゴルの乳加工過程においては乳脂肪、乳タンパクという順で分離するのが普通だが、搾乳後、加熱、乳タンパクを分離し、その際出てくる液体から乳脂肪を分離するというように、乳タンパク、乳脂肪の順に分離する。これは最初の分離

の際に乳タンパクと乳脂肪を一緒に分離するという見方も可能であるし、またこれを洗練されていないと見なし、技術の伝播過程にあると分析することも可能であろう。しかし、ダルハド女性は実家では、スタンダードな方法による分離手順で乳加工を行っていることより、トナカイ乳自体の特性がこのような行程を生み出していると考えるのが妥当だろうと考える。トナカイ乳は糖分が低いほかは、タンパク質、脂質、ミネラルいずれも草原家畜と比べると圧倒的に多く含んでいる。このことがどのような乳加工にいかなる制約もしくは可能性を持ち得るのか、化学的実験も含めて調査をしなければなるまい。

さらにここで作られるチーズは非発酵乳を濾過、加圧、乾燥させて作られており、モンゴル語で言えばホロードと呼ぶべきものであるが、彼らはこれをトバ語でアールシと呼び表している。不思議なのはトバ語のアールシの意味をモンゴル語でアーロールと応えることにある。アーロールとは酸乳を凝固させた酸味のあるチーズをいい、全くの別物である。このねじれ現象は乳加工がモンゴルの影響下にあることを示していると考えられるが、より精緻かつ広範囲にわたる調査が必要であろう。モンゴルのトナカイ飼育民トバ人の乳加工および利用方法が、社会主義時代から現在に至るまでいかなる変化を経てきたかを概観し、トナカイ利用における草原化の様子を明らかにする。

(にしむら・みきや/NPO 法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ)